研究構造図

研究主題

主体的に学びを拡げる子どもの育成(1/3)

～体育科における指導方法の改善を通して～

【研究仮説】

〇学習内容の明確化や学習環境の工夫を図ることによって、意欲と見通しを持って主体的に学び続けるようになるとともに、他者との関わりを大切にしながら学ぶ楽しさを拡げていくであろう。

〇少人数であることの利点を生かした系統的な指導計画の改善、評価の工夫をすることで、自己の成長を実感しながら学びを拡げるであろう。

【視点１】

学習過程の確立

・１単位時間の授業の流れの確立

・少人数を生かした単元計画の作成

１年次

【視点２】

系統的な指導の確立

・系統性をふまえた年間指導計画作成

・少人数を生かした学習内容・環境の工夫

２年次

【視点３】

評価法の確立

・異学年学習の評価

・主体的に課題を解決するための評価方法

３年次

日常の教育活動

１年目	２年目		３年目
体育科の基本となる学習の流れの確立	系統性をふまえた指導の確立	年間指導計画の改善	評価方法の確立

指導法の充実

１．研究主題設定の理由

本校では、学校教育目標を『自分から取り組む、自分で取り組む子どもの育成』と掲げており、昨年度までは、その中の重点項目である、「美しい心の子どもの育成」を受け、道徳科の研究を推進してきた。昨年度までの２年間は、「話せる子どもの育成」を研究主題とし、道徳科を切り口としつつ、すべての教育活動を通して学校の教育目標や目指す子ども像の実現を図っていくことを明確にするために、「授業力・教師力・学校力の向上を目指した学校改善」を副主題とし、研修を行ってきた。２年間の研修の成果として、導入、展開、終末における工夫によって、話したい、考えたい、聞きたい、話し合いたい、つなげたい、ひろげたいと思いを持ち、話す子どもたちの様子が多くの場面で見られるようになった。

ここ数年、児童の生活習慣の乱れや運動能力の低下については全国でも問題になっている。本校で実施しているアンケートにおいても、基本的生活習慣の確立ができていなかったり、子どもたちが体育を好きなことと裏腹に、運動能力面での評価の低下が見られた。さらに、本校はこれから先どんどん人数が減少し、今の学習形態での体育授業のままでは、単元の目標を達成することや運動能力の向上が難しい学習がでてくる。

そこで、今年度から新たな課題として、学校教育目標の重点課題の２つめである、「健康な体の子どもの育成」を受け、体育科の研究を推進していくこととした。

今年度の設定に当たってまず、児童の実態を踏まえた本校教員の共通理解を図った。本校の児童の良さとして、「言われたことにはきちんと取り組む」「素直である」という点が挙げられた。課題として、「主体性の無さ」「小規模校ゆえに見本になる児童や行動の不足」「生活経験の少なさ」があり、とくに様々な場面で児童の「反応の薄さ」について多くの教職員が課題と認識していた。そこで、本校児童が体育の授業に「主体的」に取り組む姿を目指し、研究主題を「主体的に学びを拡げる子どもの育成」と設定した。また、『主体的とは』、子どもたちが運動を楽しい、もっとやりたいと感じながら、活動に見通しを持って、自ら進んで体育の学習に取り組む姿、『学びを拡げる』とは、学んだことをもとに、より技術を向上させるためには、より楽しくするためには、より工夫するためには、など考え続ける姿、また、他者との関わりを大切にしながら積極的に行動する姿であることも確認し、子どもたちが運動に取り組むとき、そのような姿が見られるようになることを目指していくこととした。

２．「主体的に学びを拡げる子ども」とは（目指す子ども像）

・学ぶ楽しさを味わいながら，課題の解決に意欲と見通しを持ち、進んで活動する子ども
・自分やチームの技術がより向上するためにはどうすれば良いのか工夫を考え続ける子ども
・他者との関わりを大切にしながら、学び合う楽しさや自己の成長に喜びを感じることができる子ども

３．研究仮説

〇学習内容の明確化や学習環境の工夫を図ることによって、意欲と見通しを持って主体的に学び続けるようになるとともに、他者との関わりを大切にしながら学ぶ楽しさを拡げていくであろう。
〇少人数であることの利点を生かした系統的な指導計画の改善、評価の工夫をすることで、自己の成長を実感しながら学びを拡げるであろう。

４．検証方法

・児童アンケートを６・１２月にとり，変容をみとる。
・担任による評価を６・１２月に行い，変容をみとる。
・研究授業を通して、研究内容の妥当性や子どもの様子の変容をみとる。
・学校評価の項目に関係する項目を位置付け，保護者のとらえの変容をみとる。
・年度ごとに研修成果と課題の検証を行い、次年度の研修課題の方向性を明確にする。